

知恵ある人の教えは命の“いずみ”である。(箴言13章14節)

編集：愛宕町教会・総務部 発行者：矢戸俊介 発行所：甲府市北口3-4-23 日本基督教団愛宕町教会 TEL 055-253-3150 URL <http://www.geocities.jp/atagomachikyokai/>

みことば

アブラハムの死

聖書 創世記 第25章7・8節

愛宕町教会牧師 矢戸 俊介

アブラハムの生涯は百七十五年であった。アブラハムは長寿を全うして息を引き取り、満ち足りて死に、先祖の列に加えられた。

(創世記 第25章7・8節)

アブラハムは長寿を全うして息を引き取り、満ち足りて死に、先祖の列に加えられた(8節)——神様に信頼したアブラハムの一生が充実していたことを述べた言葉です。ここでは後に残される人々にとってアブラハムの生涯の持つ意味が考えられているのです。

ここに述べられている先祖の列という言葉から聞こえてくるのは、今を生きている人々に先立って生きた無数の先人の連なりです。今生きている人々に先立って生き、地上の生涯を終えた大勢の先達たちの連なりの中にアブラハムも迎えられ憶えられるようになったことが、この言葉で言い表されています。

アブラハムは、神様が彼のために備えてくださった地上の生涯を全て生き切った時、先人たちの歴史の中に場所を与えられました。人の生涯の歴史的な意味は、その生きざまに目を注ぐ

だけで充分分かる訳ではありません。どんな時代、どんな人の間に生きたかということによっても人生の意味は変わります。

そこで、すこし広い脈絡で考えてみたいのです。創世記6〜10章にノアの洪水の話が出てきます。広く知られている大災害の話ですが、あの記事が伝えているのは神の裁きによる滅びという事柄だけではありません。

ノアの洪水は神様による新しい始まりを告げる希望の物語でもあります。洪水後、ノアたちは箱舟から出て、厳しい時を守り支えてくださった神様に感謝し礼拝をささげます。神様はその礼拝を喜ばれノアとその家庭を祝福して「産めよ、増えよ、地に群がり、地に増えよ」(9章7節)という言葉掛けてくださいます。洪水の荒廃の中から、それでもノアたちに将来が与えられ、そこから地の面に人間が増えていった様子が、10章の民族表に記されています。ノアたちは、信仰によって救いの中を生き始めるのです。

ところが人間はその救いを忘れ、神様による希望を見失い高ぶってしまいます。そんな中で次の

のバベルの塔の出来事が起こります。あの出来事は、自分たちが神様に伴われ、守られ、持ち運ばれているという感覚を失った世代が自ら神と等しい者になるうと企て、自分たちの力の象徴として高い塔を築こうとします。

バベルの塔の高さには人間の傲慢さが表れています。人の心の奥底にひそむ神とも肩を並べられるという思い上がりが形を取ったのがあの塔です。しかし、その傲慢さこそ、逆に人間を孤独にして追い詰めてしまう原因になるのです。塔を造ろうとした人々は結局、お互い同士の間で言葉が通じなくなり共同作業をあきらめ、全地に散らされたと述べられています。

そして、そんなバベルの塔の出来事に続いてアブラハム物語が語られるのです。神様はせっかく災害から救い出した人間が、神様の救いを忘れて傲慢になり、お互い同士も言葉と心を通わせられなくなったのをご覧になって、今度はアブラハムという一人の人間を選び、この一人に御言をかけ、神様に信頼して生きて行くように導こうとなさいました。そして、その生涯を祝福の基としようとなされたのです。アブラハムは神様の御言を聞かされ、聞き分けて生きた最初の人間であり、御言を聞いて生きる人々すべてのモデルケースのような人生を生きた人だったのです。

神様はアブラハムの生涯の

折々に現われ、彼を励まします。「わたしはあなたを祝福する。見知らぬ土地でよ者として暮らさなければならぬとしても、高齢であっても、わたしがあなたと共に歩んで、あなたに生きるべき場所を与える。星の数ほどの子孫をあなたに与える」と約束してください。

アブラハム自身は、人生の中で様々に迷う時がありました。数々の失敗を犯すこともありましたが。それでも神様はアブラハムに語りかけてくださり、そしてその都度、アブラハムは神様の語りかけを聞いて神様に信頼する道に連れ戻されます。

やがて約束の子イサクが生まれてくるのですが、もつとも深刻な危機は、そのイサクを献げなければならぬという出来事でした。その危機の時を、アブラハムは死を越えてもお神様によって将来が与えられるという信仰をもつて生き抜きました。

神様がどんな時もきつと将来を備えてくださるという希望をもつて生きたアブラハムの生涯が閉じられるところで、長寿を全うして息を引き取り、満ち足りて死に、先祖の列に加えられたという言葉が宣言されます。

これはわたしたちへの招きの言葉でもあるのです。神様がきつとわたしたちにも将来を備えてくださいます。信じて終わるまで生きることが次の世代に満ち足りた人生を指し示す鍵であると教えられます。

洗礼式・信仰告白式にあたって

信仰告白

信仰告白

入来 澄子



まず、わたしが今この場所に立てたことに感謝いたします。

35年前、主人の転勤により甲府へ来ました。これまで80年あまりの人生を思い返すと、出会い、エンカウンターが大変大切なものでした。この愛宕町教会へ辿り着きましたのも、幾つかの出会いとのお陰です。神さまによろやく、「ここに来ても良い」と許されたのです。

わたしは、昭和37年から主人の留学に付いて、当時の西ドイツ・バルナウハムで5年ほど暮らししました。そこで、デーネ一家と出会い、親しくしていました。その長女、エレン・デーネ牧師との出会い、それから繋がり、スイスの牧師、チューリット夫妻との出会い、それか

ら、甲府の同窓会での葉袋洋子さんとの出会いに導かれ、穴戸俊介先生との大きな出会いに至りました。

一昨年、主人が亡くなった時に、スイスから送られてきた聖書を読むことから始まり、愛宕町教会の祈禱会に入れていただき、祈禱会の皆さまの助けを受けて今も続けております。

特に、今年4月の聖書通読会に参加させていただいたことがきっかけとなり、自分でも4月から8月までかけて、たくさん穴戸先生に助けていただきながら聖書を通読いたしました。

聖書の御言葉は、どれも大切なものだと思います。一つ挙げるのは難しいのですが、一つ挙げるとすると、エフェソの信徒への手紙2章8・9節「事実、あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。行いによるものではありません。それは、だれも誇るべきではないためなのです」。

これまで大過なく来た80年の人生ですが、人生に感謝をし、唯一信じることのできる神に

祈って生きること、イエス・キリストを救い主と信じて、残された少ない年月を全て委ねて歩みたいと思います。

(2017年12月24日)

クリスマス礼拝にて受洗)

信仰告白

荻野 和



受洗については、小学校6年生に入った頃から、少しずつ考え始めていました。バザーのケーキ作りの時に、穴戸尚子先生から勧められて、受けることにしました。

洗礼準備会では、ルカによる福音書を読みました。ですが、わたしの用事などで準備会が進まないことが多くありました。ルカによる福音書で好きな箇所は、「敵を愛しなさい」というところです。わたしは、嫌いな人を簡単に許すことができないけれど、できるだけ許せる人になりたいです。

中学に入ったら、吹奏楽部に入るつもりでいます。荻野望さんや弓田美恵さんを見ていれば

分かるように、敷島中学校の吹奏楽部は、すごく忙しいので頑張りたいです。

最後に、わたしを教会に導いて下さった神さまと、産んでくれたお母さん、これまで見守って来てくれた家族のみんな、教会の皆さん、ありがとうございました。そして、これからもよろしく願います。

(2018年4月1日)

イースター礼拝にて受洗)

信仰告白

穴戸 羌佳



わたしはクリスマスチャンホームに生まれました。生まれた年のクリスマスは2004年12月19日に、日下部教会で小児洗礼を受けました。その時の写真には、教会の方からいただいた白いドレスで抱っこされたわたしが写っています。

それからは日下部教会の教会学校に毎週通っていました。その中で、わたしは小さい子や先生方と仲良くなりました。わたしが最も影響を受けたのは、祖

父と祖母です。昇仙峡の祖父は、祖母に誘われて教会に行くようになり、クリスマスちゃんになった時の話をよくします。また、国立の祖父母は、牧師として教会に仕えてきました。また、時々、「信仰告白をしないか」と勧められました。

わたしが愛宕町教会に引越して来てから4年目に入りました。愛宕町教会の教会学校は、同世代のお友達とキャンプや行事に参加することができました。また、毎週の礼拝で、みんなととても仲良くなりました。その中で、特に石橋基文くんやその他大勢の方が、信仰告白を勧めてくれました。

好きな聖書の箇所は、「平和を実現する人々は幸いです。その人たちは神の子と呼ばれる」です。わたしも平和を実現する人になりたいです。そして、大人の教会員の仲間入りをしたいと思うようになりました。神さまが教会の人たちの言葉を通して語ってくださいと思います。

信仰告白をすることは、信仰の財産を受け継ぐことだと考えます。そのために、教会の交わりを大切にしていきたいと思っています。

(2018年5月20日)

ペンテコステ礼拝にて信仰告白)

転入会しました！

これまでの歩み

芹澤 和世



北先生ご夫妻と穴戸先生ご夫妻、そして愛宕町教会の皆様とのこれまでのお交わりを感謝しております。

私は神奈川県相模原市で（あまり言いたくはないのですが…）牧師の娘として生まれました。高校卒業後、自宅での浪人生活の後、茨城大に進学し、学生時代は水戸教会でお世話になりました。下宿が許されていなかったのですが、第一志望に落ちたことで入学した大学での学びの中で、神様の創られたこの自然界の巧みに改めて魅了され、それを紐解く研究の楽しさを味わってしまったことからこの道にハマってしまったのですが、良き道に導かれたことを心から感謝しています。よって浪

人できたことも感謝しています。

実習で訪れた高知の海で「磯焼け」と呼ばれる海の砂漠化を見たことから海藻の生態に興味を持ちましたが、茨大には藻類を専門とする先生が居られず、また所属した研究室は外部での卒業研究は認めない方針だったため、他大学の大学院に進学して海藻について学ぶことにしました。進学先を探して北海道から沖縄まで、いくつかの研究室を訪ねましたが、最終的には考えてもみなかった東京水産大学の大学院に落ち着きました。修士の学びを終えた後、地元神奈川県で臨時任用や非常勤講師として高校生達と楽しい日々を過ごしましたが研究への思いが勝り、いろいろ悩んだ末に「進学するとしてもここには残らない」と思いついた研究室に再び戻り、学びを続けました。途中から品川で下宿をすることになり、その際は高輪教会でお世話になりました。学位を取得した後就職先が決まらず研究生となりましたが、思いがけずに東海海洋研究所で期限付き研究員として採用されたので清水に移り、当時の清水村松教会でお世話

になりました。その後、所属長の紹介のおかげで、大型藻類が専門の私が当時の海洋科学技術センター（深海に海藻は居ません）が：そこは深海に関する研究所です）の期限付き研究員になることができ、横須賀に移り、金沢八景教会でお世話になりました。その間に東水大で一緒だった芹澤と結婚し、しばらく別居生活を送りましたが、私が夫のいる千葉大小湊実験場の協力研究員となつて鴨川へ移り、知合いの牧師先生が牧会されていた、私を含め信徒2人の教会でお世話になりました。その後、夫が東海海洋学部採用されたので清水に戻り、再び清水村松教会でお世話になりましたが、2年で山梨大に移ることになり、甲府に参りました。

清水村松教会は小さな教会で、その上、大きな問題を抱えていたこともあり、転出しないうちに、これまで愛宕町教会で礼拝を守らせて頂いておりました。先生が神様の身元に召され、教会も解散となったのを期に、愛宕町教会の教会員として歩ませて頂くことになりました。

若い方々に何か参考になればと思い、長々と書いてすみません。自分を見つめ、進路について考えることはとても大切です。が、私の場合はほとんど自分で考えた選択肢以外の道に導かれ、人間が考えられる範囲はとても狭いと思われると同時に

に、いつも、最良の道にお導き頂いていることに心から感謝しております。悩んだ後は安心して神様に委ねて下さい。聖書の学びも足らず、自分の

思いで歩んでしまうことの多い者ですが、これからもどうぞよろしく願ひ致します。

（2018年7月8日）

主日礼拝にて転入

教会音楽の学び

※主日礼拝

「主の御業を伝える民」

出エジプト記 15章 1～27節、ルカによる福音書 2章 22～35節
フィリピの信徒への手紙 2章 6～11節

※学びのとき

「神の楽器としての教会

—教会全体が賛美の器として奏でられるために—

詩編 150編、コロサイの信徒への手紙 3章 12～17節

2018年

8月19日(日)

講師

渡辺 善忠 牧師

日本基督教団 巣鴨教会

現在使用しているオルガンは、1992年1月に総費用約300万円で購入した電子オルガン「グランドオペラ」です。皆様も感じておられると思いますが、寿命に近づいている感があり、教会では次世代オルガン準備委員会を立ち上げ、その備えを検討しております。

具体的なオルガンを考える前にまず「教会音楽の学び」を計画し、上記の主題にて、渡辺善忠先生よりお話をお聴きしました。賛美の歴史と楽器の発展、教会音楽の実践的な課題、さらにオルガン導入に際しての留意点など、専門的な、少し難しいところもありましたが、賛美の重要性、礼拝の意味を共通理解するには貴重な研修でした。

（清藤城宏／次世代オルガン準備委員長）





受難節 聖書全巻リレー通読

2018年3月18日(日) 礼拝後、開始の折り
 2018年3月20日(火) 午前7時 通読開始
 ~ 29日(木) 午後10時 終了予定
 30日(金) 午後5時15分 完了

御言葉が聞かれる、善き業としての聖書通読

2017年春に初めて行った聖書全巻リレー通読。2018年も受難節(3月20~30日)に実施し、50名の参加者によって通読することができました。今後の開催については、時期や参加方法など考慮すべき点もありますが、「礼拝堂で、一人、聖書を口に出して読むことの恵み、聞くことの幸い」を味わった方々からは、継続開催を望む声が多く聞かれています。



スターの朝現場でイエス。浅尾原太陽光建設息子の話です。放蕩を思い出します。おじいさんが絵本を読んであげるところを思い出します。放蕩息子の話です。浅尾原太陽光建設現場でイエス。

参加した方々の感想

雨宮 修

継続は力なり。最低5年は続けましょう！

役員の中に世話焼きさんがいて、できるだけ多くの方が参加できるように声掛けや調整係をしてみませんか。

石垣 忍

《感想》今回は勤務が安定せず一回も参加できないかと思っておりましたが、雨天で土木現場が2日間休みとなったので読むことができ、更に土日が夜勤となったので前日にも読むことができました。夜勤の現場は明野のハイジの村近くでした。ハイジという、私にとっては、アルムの山に帰してもらったハイジがおじいさんに絵本を読んであげるところを思い出します。放蕩息子の話です。浅尾原太陽光建設現場でイエス。

を迎えました。このように通読に参加できたことを感謝いたします。

《意見・要望》お母さんから「前日空いている」と知らされ、娘さんが自転車であられたが、記入されていなかったため、他の方が読まれました。時間が確定できない方のためにも何か方法を考えていただければと思います。牧師先生に負担にならないように。

石橋 茂美

今年は、日にちの関係で、十分な時間が取れました。一時間という時間はあつという間、礼拝堂の中に声が響き、まるで、神様と私だけの濃密な時を過ごしているかのようでした。息子がもっと小さい頃に、本を読んであげている時のようでもありました。

豊かな時を与えられ、心から感謝しています。

河西 光代

生まれて初めての聖書輪読を礼拝堂で読ませて頂きましたが、神さまが見て聞いて下さると、身の震える思いで読

みました。神さまと自分が向き合い、畏れさえ感じましたが、大切な経験をさせて頂き感謝します。

これからも積極的に参加をしたいと思っています。

小林 洋子

2年目の通読にも、許されて参加させていただけました。心よりの感謝です。

折しも、自分の入院と重なり、何とか参加させてもらえたらな...と祈っておりました。60分は、あつという間のようでした。私にとって、時宜にかなった箇所、御言葉でありました。まさに、まさに、心からありがたく嬉しかったです。次回も開催を望みます。

穴戸 尚子

参加できて幸いでした。この企画ができることは、本当に特別なことだと思います。継続していく中で、他の教会の方たちや、教会の外の方たちも加わって下さるような開かれた試みとなっていくかもしれないので、継続を希望します。

立澤恵美子

聖書通読2年目。1年目は、かなり緊張して読んだ記憶があります。目が文字を追うことに必死でしたが、今年はもう少し余裕を持って読むことができました。一人で通読することはとても大変なことです。しかし、教会に組み込まれた1人として、読み進むことは、とても励みとなります。今回、読みながらずっとこのまま読み続けたいと思う気持ちに心が沸き起こり、とても不思議でした。

神様のなさることは、思いを超えて本当に不思議です。毎年、聖書通読が行われることを希望致します。

谷沢 恵錫

教会に来て、誰もいない会堂で聖書を読むことは、とても神様のご臨在を感じる事ができました。すばらしい神様の御声が聞こえるような、そんな大切な時間を過ごせることが出来たことに感謝です。

ぜひ、また、こんな機会があったらと願っています。ありがとうございました。

御言に聴き、待ち望む

旧約聖書 ハバクク書 第3章

ハバククの憂いを含んだ祈りに学ぶ(3)

《講師》 穴戸 俊介 牧師

2018年9月16日(日) 礼拝後～《講演 12:45～、分団 14:00～、全体会 15:20～》

2018年教会全体研修会 3年連続研修会(2016年～2018年)

講師よりのメッセージ

ハバククはエレミヤと同時代の預言者。ハバククは神殿に仕える祭儀預言者だったため、公に発言することはなく、もっぱら祈りの言葉がハバクク書の基調をなしています。

3年目の今年は、その祈りが賛美に移り変わって行く様子を聞くこととなります。困難な時代に、いかに祈り、誠実な賛美の声をあげたかを聴き取り、私たちの教会生活を重ね合わせて考えたいと願います。



(1)はじめに

教会の姿を聖書の御言の中に見出そうとしてこれまで2年間ハバクク書を聞いてきました。今回は第3回であり、いよいよまとめです。これまで聞いてきたのは、こんな言葉でした。

(2)ハバクク書の構成

2016年

◎1章1節～2章4節《預言者(ハバクク)の祈りと主(ヤエウエ)の答え》

表題(1・1)

祈り1(1・2～4)

「不法」と訴えているのに、神様は正義を示して下さらない。正義が曲げられるのは何故か?

答え1(1・5～11)

正義は示される。カルデヤ人(バビロニア)を通して。祈り2(1・12～17)

裁きを行い、正義を示すためにバビロニアが備えられた。絶え間なく剣を抜くバビロン人を用いても良いのか?

答え2(2・1～4)

神の裁きは必ず行われる。待っていないさい。正しい人は信仰によって生きるのだ。

2017年

◎2章5～20節《高ぶる者(カルデヤ人)の罪》

その1(2・5～6a)

繁栄(富・酒)は人を欺く。その2(2・6b～8)

略奪者はその略奪で債務を重ねている。その3(2・9～11)

はかりごとで富を重ねても告発される。その4(2・12～14)

力の信望者は空虚な目的のために尽力するようになる。その5(2・15～17)

人間の尊厳を軽んじることが自らの裸を晒すようなもの。その6(2・18～20)

偶像礼拝は形だけ。答えはない。2018年

◎3章1～19節《讚美の歌》

表題(見出し)(3・1)

嘆願(3・2)

裁き主のおとずれ(1)(3・7～12)

裁き主のおとずれ(2)(3・13～15)

戦慄するハバクク(3・16)喜びも一つ一つの幻と信仰によって「生きる」こと(3・17～19)

(3)3章は讚美歌の言葉

◎3章1節は詩編の見出しと同じ。つまり讚美歌である。3章の最後の言葉(19節b)も同じことを指し示している。(ex. 詩編17編、詩編86編

a.c.)

1▼預言者ハバククの祈り。シグノトの調べに合わせて。

19b▼指揮者によって、伴奏付き。

*詩編17・1 祈り。ダビデの詩。主よ、正しい訴えを聞き

わたしの叫びに耳を傾け祈りに耳を向けてください。わたしの唇に欺きはありません。

*詩編86・1 祈り。ダビデの詩。主よ、わたしに耳を傾け、答えてください。わたしは貧しく、身を屈めています。

見出し語に「祈り」と書き込まれている詩編は苦しみや嘆きを神様に訴える詩(苦難の詩編)が多い。ハバクク書3章もそれと同じ始まりの形を持っている。↓すると、2節以降では、

神様への訴え、あるいは嘆願が述べられることが予想される。

(4)神様への嘆願

「怒りのうちにも、憐れみを忘れないでください」

2▼主よ、あなたの名声をわたしは聞きました。主よ、わたしはあなたの御業に畏れを抱きます。数年のうちにも、それを生き返らせ、数年のうちにも、それを示してください。

怒りのうちにも、憐れみを忘れないでください。

見出しから予想されたとおおり、ハバククは神様への嘆願を

語る。

すでに1章と2章で、ハバククは二つの答えを聞かされてきた。

①神の民の罪が大きいために、その裁きとして、神様はカルデヤ人を差し向ける。(1章)

②カルデヤ人もまた、彼ら自身の高慢のゆえに神様の6つの裁きの下に置かれる。(2章)
↓ハバククは、神の御業(裁き)が行われることを覚悟している(御業を示してください、と祈る)が、「怒りのうちにも、憐れみを忘れないでください」と願う。(憐れみを求める嘆願)

(5)裁きの主のおとずれ(1)

裁き主の描写《威厳と威光／御力／疫病と熱病／大地の計測と破壊》

3 ▼神はテマンから 聖なる方はパランの山から来られる。その威厳は天を覆い 威光は地に満ちる。

4 ▼威光の輝きは日の光のようであり そのきらめきは御手から射出でる。御力はその中に隠されている。

5 ▼疫病は御前に行き 熱病は御足に従う。

6 ▼主は立って、大地を測り見渡して、国々を駆り立てられる。とこしえの山々は碎かれ 永遠の丘は沈む。しかし、

主の道は永遠に変わらない。

7 ▼わたしは見た クシヤンの

幕屋が災いに見舞われ ミディアンの地の天幕が揺れ動くのを。

讃美歌本体(3〜15節)は、語られている言葉の調子から二つの部分に分けることができる。

前半部分(3〜7節)では、裁きを行うために来られる神様が三人称の形で述べられている。テマンⅡエドム地方北部、パランの山Ⅱエドムとユダの境にある山、クシヤンⅡエジプト語のキシユ(陽に焼けた)から由來し、エチオピアのこと、ミディアンⅡエドムの南方にある国および、その地の人々。「わたしは見た クシヤンの幕屋が災いに見舞われ ミディアン地の天幕が揺れ動くのを」(7節)Ⅱ主の裁きが次第に近づいてくる様子が述べられている。

(6)裁きの主のおとずれ(2)

8 ▼主よ、あなたが馬に乗り 勝利の戦車を駆って来られるのは 川に向かって怒りを燃やされるためか。怒りを川に向け 憤りを海に向けられるためか。

9 ▼あなたは弓の覆いを取り払い 言葉の矢で誓いを果たされる。あなたは奔流を起こして地をえぐられる。

10 ▼山々はあなたを見て震え 水は怒涛のように流れ 淵は叫び、その手を高く上げる。

11 ▼あなたの矢の光が飛び 槍のきらめく輝きが走るとき 日と月はその高殿に留まる。

12 ▼あなたは、憤りをもって大地を歩み 怒りをもって国々を踏みつけられる。

13 ▼あなたは御自分の民を救い 油注がれた者を救うために出て行かれた。あなたは神に逆らう者の家の屋根を砕き 基から頂に至るまでむき出しにされた。

14 ▼あなたは矢で敵の戦士の頭を貫き 彼らを嵐のように攻められた。彼らの喜びは、ひそかに貧しい者を食らうように わたしを追ひ散らすことであつた。

15 ▼あなたは、あなたの馬に、海を 大水の逆巻くところを 通って行かせられた。

裁き主の接近を感じると、ハバククは落ち着いていられなくなり、直接神様に祈り始める。8節の祈りでは神の御心を尋ね求めている。「主よ、あなたが馬に乗り 勝利の戦車を駆って来られるのは 川に向かって怒りを燃やされるためか。怒りを川に向け 憤りを海に向けられるためか」(8節)。

ここに述べられている「川」や「海」は人間の歴史の流れや、混沌とした世界を表わしていると思われる。ハバククは、神の裁きが、人間の過去の過ちに対して下されるのかと尋ねている。

しかし、裁きは過去の過ちに照らして行われるのではない。今現在の神の民のありように対して裁きが行われる。一人ひとりが一体何に立脚し、どれほど高慢かを、神様は確かめられる。「あなたは神に逆らう者の家の屋根を砕き 基から頂に至るまでむき出しにされた」(13節b)。

(7)戦慄するハバクク

16 ▼それを聞いて、わたしの内臓は震え その響きに、唇はわなないた。腐敗はわたしの骨に及び わたしの立つているところは揺れ動いた。わたしは静かに待つ。われわれに攻めかかる民に 苦しみの日が臨むのを。

神様の裁きが過去の歴史における過ちに対して下されるのではなく、今現在のありように対して下されると聞いたハバククは肝を潰す。「わたしの立つているところは揺れ動いた」(16節b)

なぜ、肝を潰すのか？腐敗が抜き難くどの人の中にも見出されることを、ハバククは知っている。「腐敗はわたしの骨に及び」ここに至り、2節の嘆願が本当に切実なものとなつて来る。

憐れみを欠いた神様の裁きの前では、誰も立つていられない。「生ける神の手に落ちるのは、恐ろしいことです」(ヘブライ人への手紙10章31節)。

ところがここから、ハバクク

書最大の秘密ともいふべき展開が起ころ。

(8)喜びも一つ幻と信仰によって「生きる」こと

17 ▼いちじくの木に花は咲かず ぶどうの枝は実をつけず オリーブは収穫の期待を裏切り 田畑は食物を生ぜず 羊はおりから断たれ 牛舎には牛がいなくなる。

18 ▼しかし、わたしは主によって喜び わが救いの神のゆえに踊る。

19 ▼わたしの主なる神は、わが力。わたしの足を雌鹿のようにし 聖なる高台を歩ませられる。

指揮者によって、伴奏付き。17節は、3節から始まる裁きの神の到来とその裁きの実現の言葉と受け止めることができる。神様の裁きが臨むため、一切の実りが生じなくなり、家畜も死に絶えて羊のおりも牛舎も空しくなる。

ところが、そのような裁きの結果が進行するさなかにあつて、ハバククは喜び踊るのである。「しかし、わたしは主によって喜び わが救いの神のゆえに踊る」(18節)。

どうして裁きのさなかにあつて、ハバククは喜び、踊ることができるのか？ハバクク自身の答えは「主によって喜び」「救いの神のゆえに踊る」というもので

ある。
ある説教者（リュティ）はこ
う述べている。

「ハバククがこのようになり得
た」ということは、分かり切っ
た当たり前のことではありませ
ん。この人物が、すなわち、地
にうつ伏し：また、この世界を
憂え、心痛のあまり腐れが骨に
まで入った彼が、そういう人物
が、今、立ち上がり、主を樂し
むということ、それは驚くべき
特別な恵みです。

ここには、ナインで生じたし
るしとつながるようなしるしの
出来事が起きています。即ち、
ナインでは、生と死を支配なさ
る主が、葬列の中に分け入って、
棺に納められたやもめのひとり
息子をいのちへと取りもどして
くださいました（ルカ7・11・
15）。そして今、ここでも、ハバ
ククのうえに、主を待ち望む者
は『決して辱められない』とい
う約束が成就しているのです。

『しかし、わたしは主によって喜
び わが救いの神のゆえに踊る』
これはハバククに与えられた、
そして、いつまでもそのよう
であり続ける、独特の楽しみです。

それは、神を愛する者たちか
ら誰も取り去ることのできない、
『完全な愛』です（ヨハネ15章）。
この愛を他にして、預言者ハバ
ククはもはやどんな愛をも知り
ません。ハバククは、自分自身
や自分の人柄という点に目を留
める時には、なにより一つとして喜

ぶべき根拠を持ちません。世界
の成り行きに目をとめる時にも、
また同様です。けれども、『主を
仰ぎ見る人は光と輝き 辱めに顔
を伏せることはない』（詩編34編
5節）のです」。

(9) 3年間の研修のまとめ

ハバククは、神様の裁きが行
われ、神の民が自らの高ぶりの
ために散々苦しんでいるさなか
にあっても一つの喜びを示さ
れ、見出すことができました。
それは、彼が一つの洞察を持っ
たためです。

13節でハバククは言います。
「あなたは御自分の民を救い 油注
がれた者を救うために出て行かれ
た。あなたは神に逆らう者の家の
屋根を碎き 基から頂に至るまで
むき出しにされた」。

わたしたちの惨めな姿を明る
みに出し、裁きを行う方が、ご
自分の民を救うために、また、
その油を注がれている者を救う
ために来られた方だという洞察
です。思わず、これが旧約聖書
であることを、忘れてしまいそ
うな程のことが、ここには述べ
られています。裁きの神が、救
いをもたらそうとしてやってこ
られたのだと、ここには述べら
れています。

★

3年に亘った研修ですが、
元々は数によって教会の状況を
見定めようとするのではなく、

聖書の中にわたしたちの教会の
姿を見出したいと願って始まっ
た研修でした。聖書の神様は、
「それにも拘らず」の神様です。
人間の現実には希望は限り、心
を向けようとし続ける限り、わ
たしたちには希望はありませ
ん。しかし、そんなわたしたち
のために、神様は確かに御子を
送って下さいました。

それは、ハバククに示された
「もう一つの幻」（2・3）がさら
にハッキリと示されたようなこ
となのです。

主イエス・キリストがわたし
たちのために十字架に掛かって
死に、しかし復活しておられま
す。わたしたちは、その神様の
御業にこそ心を向け、力を与え
られたいと願うのです。



今年、3年連続研修会の3
年目、締めくくりの年として、
宍戸牧師の講演後、6つの分団
（アブラハム、イサク、ヤコブ、
ヨセフ、サムエル、ダビデ）に
分かれて話し合いの時を持ちま
した。各グループともハバクク
書の御言葉を中心にして会話が
弾み、主にある交わりの恵み豊
かなひと時となりました。

講演をただ聞いて終わるので
はなく、3年の恵みを分かち合
い、連続研修会のまとめとする
ことができましたことは感謝で
す。

全体会で分団の様子的一端を
発表したが、改めて紙面に記
し、記録とします。

（宣教部）

《アブラハム》

◎山懸譲治、◎渡辺春美、宍戸
俊介牧師、雨宮修、河西光代、
弓田仁美

▼山懸兄のお祈りの後、一人ず
つ感想を述べた。

*今の青年期の人たちは、「何
故、人は生きるのか？」とい
うような、利根的な疑問を
持っている。そこがハバクク
と共通するのではないか？
自分自身ではどうにもならな
いような時、帰るところは神
であり、神に向かつて進むこ
とが大切だと思う。

*バビロン捕囚によって国が滅
びる時に、ハバククは祈りに
よって希望をもった。そこが
すごいと思う。

*私たちはどんなふうに神を信
じたらいいかを、常に問われ
ている。ハバククを通して、
私たちが今、どのように神に
向かうのか、自分に照らし合
わせて聞くこと、神と対話し
ていくことの大切さを知っ
た。

*初めて研修会に参加した。愛
宕町教会では聖書を細かく勉
強していて、とても良いと思
う。いろいろな苦しみがあっ
ても、命を与えて下さり、守っ
て下さることが、喜びです。

▼ここで、クリスチャンホーム
は家の中でも教会の話ができ幸

せとか、一人であってもクリスマスチャンとして続けていくことの大切さなど語り合った。また、町内での自治会の活動を通して、クリスマスチャンとしてどのように接したらよいかなど語り合った。

*人間の力ではどうにもならない状態でも「神様」と呼ぶことができるかどうか、希望をどこに置くか、ということが大切。

*全てがなくなってしまう見放されたと思う時、私たちは落ち込むけれど、そういうことを通さなければ、人は神の御手がわからないのではないかと？何もかもなくなってしまうことで、本当の幸せが見えてくると思うことがある。

▼時間が来て、主の祈りにて終わる。



《イサク》

◎井波忠志、○雨宮健、石垣忍
谷内清、河野光恵、宮澤栄子、荻野淳子

▼祈りを以て始める。

*あまりハバクク書は読んでいない。

*国が亡びる時はこんな状況になるのかと思う。

*歴史を導くのは神様である。神の裁きは恐ろしい。

*ハバクク書は語り部ではない

か。

*読んでいくうちに、自分との接点がわかった。

*よくわからない。

*滅びから讚美にかわった。外国からの脅威、疫病の脅威、希望が無くなる時、主を呼んだ。

*御言葉 2章4節「神に従う人は信仰によつて生きる」は重い。

*どうしようもない過去を、神が変えてくださる。現在を喜ぶ。



《ヤコブ》

◎弓田寛志、○古屋律子、河野和彦、清藤城宏、小林洋子、宮澤陽美、廣瀬美香

▼私たちの分団では、まず、一人一人に感想を聞きました。

*思い悩みながら神と対話するハバククに親近感を覚えた。

*結論は特別なことではなく、2章4節「神に従う人は信仰によつて生きる」ということ

ではないか。ハバククの心は何も変わらず、神に捕らわれているゆえに希望と確信を持っている。

*3年目で初めて出席した。2章4節「神に従う人は信仰によつて生きる」は、私たちにも迫ってくる。この幻が与えられていたから、ハバククは

喜び踊る。自分もそうでありたい。

*1、2章を復習してきた。国の滅亡もまた、神の御心である。ハバククはぼやき続けているが、信仰によつて支えられ、滅びを受け入れ、希望を持っている。

*16節「内臓が震える」ほどの恐れとは、どれほどのものかと印象深かった。神への恐れと共に、改めて、そのように畏れ多いお方に、自分は祈っているのだと思った。

*命を取られることや国の滅亡などは想像できないこと、また、暗闇の中での嘆きの祈りということとは、自分のこととして感情移入できないが、2節の「憐れみを忘れないでください」という言葉は、自分自身のものだと思う。

*3章が賛美歌であることに驚いた。苦しく祈るうちに感謝へと導かれることがある。賛美は感謝や喜びだけではなく、葛藤しつつ祈る中で、救いの確信が賛美となる。賛美歌があるということは恵み。

▼その後、自由に発言し、様々な思いが語られました。

*思い通りにならないと分かっているのに、なぜ神に聞くのか。そこにしかない救いへと

思いを向けることができるから生きられるのだと思う。

*大事なのは、2章「沈黙し、神に信頼するように」という

こと。時代の暗さや社会に起こる出来事に動揺してしまうが、キリスト者は、神を礼拝し神に信頼して任せる姿勢を求められていると思う。

*「自分は最後まで信仰、希望を持ち続けられるか？」という不安もあるが、ハバククが「神への信頼」によつて賛美したことを覚えたい。

*3章の賛美歌は、どのような調べだったのか興味深い。



《ヨセフ》

◎雨宮恵子、○穴戸尚子、末木今朝夫、芹澤和世、荻野優、弓田愛実

▼ハバククは、3章17節になつてなぜ賛美することができたのか、私たちはなぜ賛美することができるのか、というテーマを中心に話し合いました。

*通常、死の出来事はつらい、悲しいものと受け取られるが、キリスト者は違う。死に際しても賛美する。死は罪の罰だ、ということもキリスト者にとっては神様によることで、賛美してもおかしくない。

*ノンクリスチャンの家族が「ほめよ、たたえよ」という

歌詞に違和感をおぼえ、歌いづらいと考えている。しかし私は賛美歌の歌詞に支えられている。歌謡曲と違い、賛

美歌が心の支え。神様がいてくださって絶対的な支えがあり、安心感があつて歌える。

*賛美歌は神様をたたえる歌。神様をたたえるために人は造られたから、賛美できる。賛美は神様の意にかなない、それを表現できるのが感謝。

*悲しい時も賛美歌を歌える。ハバクク書1章2章は責められ、苦闘している様子。いつかそれがやむという約束があり、その中で賛美している。神様は必ず私たちの味方でいてくださるという光が見えるから賛美する。苦しければうらみつらみ、愚痴が出がちだが、賛美できることは素晴らしいことだと思う。

*3章18節には「踊る」とある。これは比喩？ 具体的にどんな風に踊ったのだろうか？ 神様をたたえるダンスは他の宗教にもある。舞の奉納のような。

*3章には前向きな明るさ、希望が感じられる。神様に祈っているから、確信のある希望だと思ふ。

*3章17節以下は本当に歌のよう。ここからスイッチが入ったようになっている。

*3章19節の「聖なる高台」とは？

*家族が仏教徒で同じお墓に入れないから、洗礼に踏み切れないという知り合いがいる。ハバククに与えられた喜



びは救いの喜びだが、それに気づいていない人は救われないか？ 困難の中でもハバククは喜び続ける。信仰をもてない人はどのように救われるか？

*クリスチャンだからというところで、けむたがれることがある。キリスト教のことをよく知らない人も多い。エホバの証人と同じというイメージも強い。私にとっては信じることはとても自然なことで、なぜ信じているのかと聞かれると説明できない面もある。
*八百万の神々がいると思われるが、すべての神々は聖書の神様に覆われていると思っている。

《サムエル》

◎荻野光、○有泉美津子、中嶋長續、山懸洋子、立澤恵美子、石橋基文

▼研修会について、また日々感じていることなど話していたできました。

*予習・復習する間もなく研修会を迎えてしまい、理解に乏しく苦痛の面もあった。

*ハバクク書、エレミヤ書等を通し、困難な状況にあってもなお希望を持ち続けること、神様が希望を示してくださっていることを思い、感謝だった。

*日々の生活の中で、自己中心的な他者の行動に対してとても気になるが、信仰的に立つとハバククの嘆きにつながるのかと思う。何とかしてくださいと神様に祈るが、最善の時に備えて下さるのかと思う。

*ハバクク書全体を通して、嘆きから落ち着きが得られる。神様から示された幻、希望を得られる。

*年齢を重ねたことにより、マインスの時でも静かに待つことができるようになった。神様は黙していてもすべてご存じで分かっている下さる。

*イスラエルの民は常に不平ばかり言っている。私たちクリスチャンもこの世において誘

惑が多く、キリストが内住しているにもかかわらず、キリストを無視しているところがある。クリスチャンだから天国に行けるとは限らない。終末が近づいている。ハバククの警告を受け止めて清められ生活していかなければならない。

*祈ること、献金を捧げること、礼拝を守ること、山上の垂訓を守ること。

*教会生活において、いろいろな話を聞き、自分の中から沸き起こる大切さを守ることはよいが、他者に押し付けることではないと思う。



《ダビデ》

◎古屋秀樹、○石橋茂美、小島章弘牧師、平塚求、末木和美、清藤和子、野沢俊江

▼ダビデグループでは、バビロン捕囚の危機的な時代にも拘わらず、ハバククは主を讃美し、主によって喜ぶことができたが、「どうして讃美ができたのか？」との問いから始めて、それぞれが自由に語った。語る中で、「旧約時代と新約時代との違い」「祈りについて」「信仰の恵み」などのテーマに移行し、それぞれが自由に語った内容が以下である。

*讃美はどの時代（旧約の時

代）にも喜びを感じる。

*十戒、律法が与えられた喜び、守る喜び

*人間は小さなことでも喜びを感じる。これは信仰に関係なく。

*ハバククの喜びは神さまが居てくださる喜びではないか。

*旧約時代と新約時代での喜びの違いはあるのか？

*神様への信仰は同じではないか。ただ、キリストの十字架と復活を知らないから同じ喜びではない。

*喜びの反対には悲しみがある。最初は神さまは聞いてくださらない。

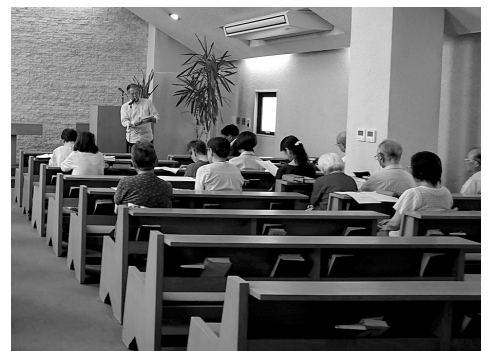
*落ち込んでいる時の祈りは、祈りの後に希望が湧いてくる。霊に力を与えられていると感じる。

*「しかし」とは神から与えられた「しかし」である。人の想いではなく神から与えられた希望である。

*「くにもかかわらず」の信仰がある。苦しみ、災難、不幸にもかかわらず、希望、祈りが出て来る。十字架と復活に繋がる旧約の時代は自然災害が多かったが「くにもかかわらず」先に進む。

*妄想を娘に語ったら、妄想を祈りに変えろ、熱心に祈れと言われた。

*毎日毎日が苦しくても、乗り越えられるのは、神様が私に何かを示してくださっている



と感じるから耐えることが出来る。

*私達の苦しみは、先に神が用意されているのではないか。それを通して何かを示してくださっている。

*救われたことの喜び：救われる前はいつも暗く、何でこうなるのかと思っていたが、救われてからは考え方がアクティブになり、心が解放され生きようと思う。教会へ来るだけで良くなる。

*祈るということについて、祈祷会の時は祈ることを教えられる。

*祈る事によって与えられる恵みがある。キリスト者は祈る幸いを知っている。祈る相手を知っている。それは確かな相手である。

*祈りに拘わらず、確かな存在を伝えるのは難しい。

(以上)



2018年度夏期伝道実習報告

愛宕町教会での夏期伝道実習

東京神学大学大学院1年 加藤 秀久

愛宕町教会の皆様、夏期伝道実習では大変お世話になりました。私は、この夏の伝道実習で宍戸俊介先生、尚子先生、教会に集う人々から多くのものを教わりました。特に、家庭集会においては、聖書のみ言葉に向かう姿勢、解き明かし方を学ぶことができました。

私が、愛宕町教会の人たちにお会いしたのは、到着した9月1日（土曜日）の夕方でした。私が教会の入り口が分からずに教会の建物をうろろろしていると、そこにちょうど、花壇の手入れをされていた教会員の方にお会いしました。その方は、日曜日の礼拝のためにお花を持って来られたようで、私が自己紹介をすると、「是非、礼拝堂へ入り、礼拝堂に活けた花々を見て来て下さい」、「花々は見てあげることで、とても喜ぶから見てあげて下さい」とその教会員の方は言いました。私は、さっそく教会に入り、礼拝堂が二階にあることを知り、階段を上り、礼拝堂に入りました。私が礼拝堂に入って感じたことは、詩編23編の御言葉でした。特に2、3節の『主はわたしを青草の原に休ませ 憩いの水のほとりに伴い 魂を生き返らせてくださる。主は御名にふさわしく わたしを正しい道に導かれる』という御言葉が思い描かれました。礼拝堂の入り口から、緑の絨毯が広がっていて、それがまるで緑の牧場が広がっているような光景が私の脳裏に浮かびました。天上の窓から光がたくさん入り、十字架が輝き、そして講壇の両脇には、綺麗な花々が活けてありました。まさにそこには、主の安らぎがあり、詩編23編の世界が広がっていました。神様がこの礼拝堂で人々を温かく迎え、安らぎを与える空間にしてくださいっていることを感じました。

教会員の方の言葉通り、講壇の活け花に近づき、その花々を見てみると、綺麗に花々が咲き乱れ、確かに花々が喜んでいような感じになりました。またその教会員の方が教会の庭に倒れていた花をいくつか利用して花瓶に活けたとおっしゃっていたことがとても印象に残りました。私は、この最初の出来事の中で、愛宕町教会の持つ温かさに触れることができました。

礼拝堂見学の後、教会員の方に案内されたのが、教育館の庭でした。その方が、「綺麗に掃除したばかりなのですよ」とおっしゃっていた通り、その庭は綺麗に雑草が取られていて、手入れがされていました。日本家屋の建物に合った手入れがされていて、庭と建物がぴったりと合って、調和していました。これらはすべて到着したばかりの出来事です。私にとってはとても印象深い思い出となり、初めて教会の扉をたたき人の気持ちを知ることができたように思います。

今回の伝道実習は、私にとって初めての出来事が多

く、戸惑いもあり、愛宕町教会の皆さまには、ご面倒をお掛けしたことも多いことと思いますが、私にとって必要な経験を与えられたのだと今振り返ると思います。教会学校のサマーキャンプでは、子供たちと何台かの車でペンションへ行き、共に泊まることや、子供たちを中心としたプログラムをするということは初めての経験でした。子供たちと一緒に教会学校のプログラムを行うことにワクワクして、次に何が起こるのかと楽しみな気持ちになれたことは、本当に良い経験でした。夜の天気は悪く、予定していたキャンプファイヤーや花火はできませんでしたが、その代わりに、弓田先生が子供たちを飽きさせない楽しいレクリエーションをして下さり、素晴らしい時を過ごすことができました。この教会学校では、プログラムに関わる教師の方々のチームワークの良さを学ばせて頂きました。

今回の夏期伝道実習で、一番苦労したのが、8回の聖書研究会において、毎回違う聖書の箇所を勉強するというものでした。私が当初、考えていた聖書研究会というものに違いがあり、出エジプト記を一章ずつ読んで聖書の解き明かしをする、というスタイルに変更したことは、私にとって大きな挑戦となりました。私は、聖書に忠実に向き合えるように毎回行われる聖書箇所の原典や註解書にあたり、解説するように心掛けましたが、私の勉強不足、理解不足もあり、集まって下さる皆さんに分かりやすく説明することができませんでした。しかし、学びの中で聖書に向き合う姿勢をはじめ、聖書研究会のあり方を示していただいたこと、そして多くの兄弟姉妹の皆さんに、私の夏期伝道の学びの為に時間をとっていただいたことを、心より感謝いたします。

最後になりましたが、愛宕町教会の皆様、私を心温かく迎え入れて下さり、ありがとうございました。礼拝を通して、また諸集会を通して、愛宕町教会の皆様からは、教会へ集まる人々とどのように接し、どのように愛せば良いのかを、たくさん学ばせていただきました。

皆様には、ご迷惑、ご面倒をお掛けしたことも多くありましたが、一か月の夏期伝道実習期間を共に過ごさせていただき、本当にありがとうございました。また実習に格闘している私を心にかけて下さり、交わりの中へと誘い出して下さった教会員の方々には、多くの励ましとお支えをいただき、感謝の言葉が尽きません。主にある兄弟姉妹、家族として出会うことができ、共に神様のことを学ぶことができたことを、私の宝物としてこれからの学校での学びの励みとしていきたいと思っています。

続けて、愛宕町教会の皆様が主の豊かな守りの中にあつて、良き働きがなされますようにお祈り致します。

編集後記

- ▶ 本号は通常より紙面を拡大し、10ページの読み応えのある号としました。特に3年間の連続教会全体研修会の要旨と分団の様子を掲載しました。私たちの教会はキリストを頭とし、体である教会に私たちは結び合わされている、言葉を変えて言えば「分かち合いの教会（信仰共同体）」であることを、読みながら一層感じさせられました。言葉の端々に神を信頼し真つすぐに神を仰ぐ姿勢が感じられます。聖書全巻リレー通読の感想を読んでもそうです。教会でやろうということに、なんとか教会員とし参画したい思いが伝わってきます。
- ▶ クリスマスを待ち望む時期を迎えています。クリスマスを祝う「分かち合いの教会」に、更に外の人たちも加わっていただけるようなクリスマスを迎えたいものです。(KS)